

います。天文学でも、研連と学界との関連や、研連委員の選びかたが問題になっています。今のところ、この問題は学会の新体制が発足するまでおあずけになっているわけですが、いずれにしても、天文学においては、研連は将来計画をも扱う広い範囲の活動をしていることも考慮し、研連を一人一人の研究者と学術会議とをつなぐものとして位置づけ、より強力なものとする必要があると思われまふ。この点からいって、現在の日本天文学会は研連とは一応別に考え、将来、研究者部会といったものが必要になったときに、研究者の定義と共に検討しなおすのがよいのではないかと私は考えています。

来年は学術会議会員の選挙があります。現在からでも有権者の登録は可能ですから、資格のある方は、早めに

登録されることをおすすめします（用紙は、学術会議事務局へたのめばよい）。同時に、天文研究者の間で、学術会議のあり方、また研究費、研究体制についても討論していきたいものと思います。

付)「学術会議と学・協会との懇談会」プログラム

- 「日本学術会議のあり方について」 岡倉古志郎
- 「長期計画の現状について」 福島 要・小野 周
- 「70年代の科学をめざして」 川崎 健
- 「科研費配分について」 諸星静次郎
- 総合討論

注) くわしくは、学術会議のパンフレット「日本学術会議の現状と問題点」を御参照下さい。

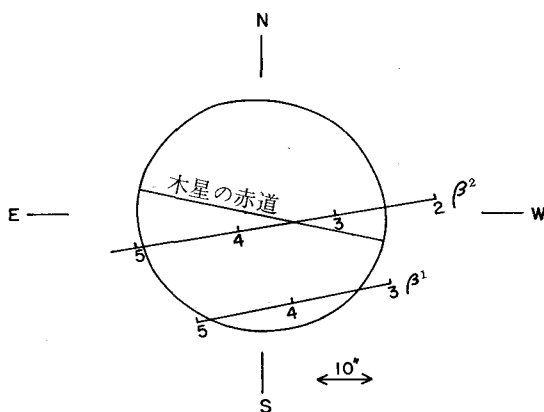
雑 報

木星によるさそり座ベータ星のえんべい

1971年5月14日早朝にさそり座ベータ星が木星にかくされる。このことはグリニッチ天文台のウィルキンスから東京天文台の古畑台長に手紙で知らせがきた。日本では潜入が南西の空低く観測条件は悪く、しかも東の方では夜が明けてしまつて出現は観測できない。観測に好条件なのは気象条件も考慮すると、マダガスカル島とアフリカ東岸、中近東の油田地帯等である。

予報は図からわかるように潜入は14日午前3時20分頃、出現は4^h50^m頃であるが、木星の位置の不正確さのために10分位の誤差はある。一、二カ月前になれば子午環観測による位置の補正量がわかるので、もっと詳しい予報がだせるはずである。図は、日本の中でも西にあって夜明けが遅い鹿児島から見たものとして計算したが、木星は遠いので視差による補正は日本国内であれば、ほとんど同じである。なお約1時間前に伴星の β^2 Scoが潜入する。

1952年に木星が5.5等星の牡羊座シグマ星をかくした。この時はバウムとコードが光電測光を行ない、光度曲線の傾きから平均分子量3.3と結論をだしている。(A.J., 58, 108, 1953)。今回は2.9等星であるから、もっと質の良い結果が期待される。1968年4月に海王星による恒星のえんべいがあり、日本やオーストラリアで観測されて、海王星の形や大気構造についての資料が得られたことは、東京天文台の諸氏による報告が本誌にもあったので覚えておられる方も多いと思います(天文月報, 61巻11号272~276頁)。(成相恭二, 平山智啓)



木星とさそり座ベータ星の相対位置
 β^1 は2.9等星, β^2 は5.1等星, 数字は日本標準時

新刊紹介

天体写真の写し方 藤井 旭著 (誠文堂新光社発行, A5変型版, 287頁, 定価550円)

表紙と口絵写真4枚がカラーで、本文中に多数の写真と図を入れた非常に美しい本であり、扉に書かれている副題、小型カメラ、小望遠鏡による天体写真の撮影について、ていねいに、ほとんどあます所なく書かれている。全頁アート紙を使っているので、写真を見るだけでも楽しい。

私たちは現在手に入るものとして、すでに冨田氏(天体写真の撮影)や藤波氏(小型カメラによる天体写真)の書物を持っている。これに対し第3ジャンルの天体写真として本書の持つ意義は大きい。本書の口絵カラー写真に沈むオリオン座と大流星というのがある。天空の壮大と美しさを示すすばらしい傑作である。私はこの写真